

シンポジウム筆録

2020 年度全カリシンポジウム

オンライン授業の可能性

日時：2020年11月27日（金）18時00分～20時00分

開催方法：Zoomによるオンライン開催

登壇者：

黄 盛彬^{ファン ソンビン}（社会学部教授）

芝垣 亮介（全学共通カリキュラム運営センター英語教育研究室主任／外国語教育研究センター准教授）

中村 正人（全学共通カリキュラム運営センター兼任講師）

小川 有美^{ありよし}（法学部教授／第一次遠隔授業活用検討ワーキンググループ座長）

司会：

飯島 寛之（全学共通カリキュラム運営センター副部長／経済学部准教授）

1. 開会挨拶

飯島（司会） 今回司会を務めます、立教大学全学共通カリキュラム運営センター（以下全カリ運営センター）副部長で、経済学部の飯島と申します。どうぞ、よろしくお願いたします。今回は100名の皆さまにお申込み、ご参加いただきまして誠にありがとうございます。はじめに、全カリ運営センター部長、社会学部教授の井川充雄よりご挨拶を申し上げます。



飯島 寛之

井川 本日は遅い時間にもかかわらず、多数の方にご参加いただき誠にありがとうございます。ご存知のように、本年初めから新型コロナウイルス感染症が拡大しました。本学ではこのような状況にあっても「学びを止めない」との立場から、春学期の授業開始日を4月30日に遅らせた上で、全科目をオンラインで行うことになりました。全学共通科目（以下、全カリ）では、3月から急ピッチで準備を行い、春学期に、言語系でおおよそ1,350コマ、総合系で360コマを開講しました。また秋学期については、対面式授業を行っている科目もありますが、やはりほとんどの科目を、オンラインで実施しています。

今回のオンライン授業の導入は、外的状況から実施を余儀なくされたものですが、そのことでいろいろなことが分かって参りました。

一つは、「オンライン授業の弱点」です。裏返せば、これまで当たり前に行ってきた教室での対面式授業の利点を改めて認識することができました。つまり教室において教員と学生が、あるいは学生同士が顔を突き合わせて、相互にやり取りをしながら学ぶこ

との意味についてです。オンラインでは、そうした面で足りない点があることは明らかであり、新入生からの「友達ができない」という声も多く、孤立を感じている学生が多いことはさまざまな各種調査から明らかになっています。

また、教務、環境整備、教員の給与など、さまざまな面で課題があることは第一次遠隔授業活用検討ワーキンググループの報告書にも記載されている通りです。

しかしその一方で、この半年あまりの経験から、オンライン授業を対面式授業の単なる代替物としてではなく、もっと積極的に活用する方策があるのではないかと、という思いも湧き上がってきました。すなわち、対面式授業とオンライン授業を有機的に組み合わせることにより、立教の教育をさらに発展させることが可能なのではないかと考えております。

特に全カリの場合は、池袋と新座の両キャンパスの学生を対象にしていることに加え、外国語による総合系科目を、今後増やすという課題があります。その場合にも、海外にいる方にオンラインで授業をしていただくなど、これまでは思いもよらなかった教育が、今後展望できるのではないかと考えております。

本日は黄盛彬先生、芝垣亮介先生、中村正人先生のお三方に、春学期のオンライン授業の経験に基づきお話を頂戴いたします。また、第一次遠隔授業活用検討ワーキンググループ座長を務められた法学部教授の小川有美先生にも、ご登壇いただくことになりました。4名の先生方に、厚く御礼申し上げます。

今回のシンポジウムでは、オンライン授業のメリット、デメリットを踏まえつつ、全カリにおいて今後どのような形でオンライン授業を活用できるかを主にご議論いただく場としたいと考えております。どうぞよろしく願いいたします。

飯島（司会） それでは、まず社会学部教授の黄盛彬先生にご報告をお願いしたいと思います。黄先生には、全カリ総合系科目の「グローバルシティ・ソウルを読み解く」という科目をご担当いただいています。どうぞよろしく願いいたします。

2. 事例報告「グローバルシティ・ソウルを読み解く」のオンライン授業

黄 盛彬（社会学部教授）

ソウルのさまざまな場所をオンラインで訪ねて

春学期の授業を急にオンラインにすることになり、「グローバルシティ・ソウルを読み解く」の授業をどのように行ったかについてご報告させていただきます。「授業の内容・設計」、そして「授業をどのようにオンライン化したか」、「授業の評価に関わる」ところ」の3つに分けてお話しさせていただきたいと思います。

今私は自宅のデスクの前に座っていますが、このセッティングで授業を行いました。



黄盛彬

私の後ろには、Zoomのバーチャル背景で設定した風景が映っています。この写真は「ソウル市庁前」で、今は「ソウル広場 (Seoul Plaza)」と呼ばれているところです。

この授業は、毎回ソウルのさまざまな場所や空間を訪れて、社会学、都市社会学、文化研究、文化メディア研究という視点から、その場所や空間を解説するというものでした。今回のオンライン授業に際しては、毎回、Zoomのバーチャル背景でその場の写真を映すことか

ら、授業を始めました。今映し出されている写真は、ソウル広場ですが、時間的には昼ですね。(Zoomのバーチャル・バックグラウンドを別の画像に変更しながら) このように切り替えて、今の時間(夕方)に近い写真に変えることもできます。今、私の後ろに見えるのは、景福宮(キョンボックン)という朝鮮の王朝の宮殿で、その後ろには、大統領官邸・青瓦台(チョンワデ)があります。この前の広場は、光化門広場ですが、初回の授業では、この二つの広場から始まります。第二回以降は、ソウル駅や北村、鐘路、新村などといった観光スポットとしても馴染みのある場所を訪れ、それぞれの場所を説明するキー概念、例えば、伝統、ポピュラーカルチャー、ジェントリフィケーション、外国人労働者・移民、多文化化、社会的排除、貧困・格差、ジェンダー、文化資本などの社会学的概念で、その場所・空間を説明する、というわけです。

こうした授業設計の背景には、近年、あふれると言っても過言ではない、韓国情報の氾濫への問題意識がありました。

欧米の大学では、アジアスタディーズ、ジャパNSTAディーズとかコリアンスタディーズなど、言語教育と文化の教育が統合されたような形で、地域研究が提供されている現実があります。しかし日本の大学においては、学問の制度として韓国研究が不足しています。その一方で、第二外国語としての選択肢は増えているので、そこに大学人としてアンバランスを感じていました。

そこで、第二外国語で朝鮮語を選択している学生、ポピュラーカルチャーや日韓関係に高い関心を持っている学生の知的好奇心に応える授業として、この「グローバルシティ・ソウルを読み解く」という授業を設計しました。4、5年前に私から提案し、専門分野の異なる複数の教員が授業を運営するコラボレーション科目としてつくったというのが、科目の設計の経緯です。

プラットフォームには Zoom と Google Classroom を使用

次に、オンライン化に際して、どのような工夫をしたかについてですが、まず、プラットフォーム(動作環境)をどうするかを考えました。ZoomかGoogle Meetかの選択がありましたが、ルーム分割機能、チャット機能など、双方向でコミュニケーション

ができること、また全員と対面ができることなど、総合的に考慮して Zoom を使うことにしました。

授業のプラットフォームとしては、Google Classroom を使うことにしました。理由は、非常にシンプルかつ使いやすかったからです。ウェブ上の教育支援システム Blackboard や CHORUS といった、これまでのプラットフォームにも慣れていましたが、複雑であるというところに少し不満もありました。Google Classroom は、一つひとつの講義ごとに、資料やその他のアンケートなど、そうしたものをすべて統合して管理することができるのが大きなメリットでした。

そして、もう一つハードウェアの側面では、音声が非常に大事だと考えました。これは私が、学生時代に NHK の国際局でラジオ短波放送のアナウンサーをしていた経験からきている考えかもしれませんが。他に揃えるべきものをすべて譲っても、音声はきれいに聞こえたほうがいいと思い、最初はかなり大きな外部マイクを使って授業を行いました。また映像に関しても、ノートパソコンを使うこともできましたが、ノートパソコンでは、私の顔がどうしても上から見下ろしているように映るので、なるべく正面に映るように工夫しました。その後も、他の人たちといろいろと情報共有をする中で、ユーザー向けのさまざまな機材を活用すれば、より本格的なオンライン授業を実現できることも分かってきました。秋学期は研究休暇中で、授業は担当していないので、いろいろと工夫してみたいですね。本格的に自分の部屋をスタジオにするまでには至りませんでした。やろうと思えば、そうしたこともできる時代になっていることを、このコロナ禍の中で学ぶことになりました。

小グループディスカッションと「つぶやき課題」の実施

次に、実際の授業をどう行ったかを少し説明させていただきたいと思います。まず、毎回のテーマとなる授業の最初には、授業のテーマとなる場所を、Google マップのストリートビューを使って、その場所を歩いてみる仮想体験を行いました。私はソウルで大学生活を送ったので、どの場所に関しても土地勘があります。ですから、その場を画面で映しながら、まるでそこにいるかのように、画面上で前後左右の風景を眺めながら解説しました。例えば、今ご覧いただいている道の両側の建物について説明したり、この交差点で左に行くと延世大学方面に行き、また右に行けば、この道が鐘路（チョンノ）ですよと。さらにこちらに進むと皆さんがよく観光で行く明洞（ミョンドン）にも歩いて行けますよ、というような話をしたり。まるでその場にいるように、画面を動かしながら解説し、実際に現場に訪れているような仮想体験から授業を始めました。

その後、Zoom を使って 1 時間ほどレクチャーをしたあと、毎回、Zoom のルーム分割機能（ブレイクアウトルーム機能）を使って、小グループによるディスカッションを行うよう指導しました。200 人の授業でしたが、5、6 人、あるいは 7、8 人など、いろいろと分割する人数を変えて試しながら、ディスカッションを行いました。自動振

り分け機能を使っていたので、毎回、グループのメンバーが変わることも、「ライブ感」を作る仕掛けになったのではないかと考えています。

そして授業の最後には、Google Classroom を使って、簡単な課題を出し、その場で学生がレスポンスをすることも行いました。これを「つぶやき課題」と命名しました。前述のグループディスカッションと連動させ、意見を求めるときもあり、また自由に個人として発言することを求めるときもありました。例えば、「ソウル駅（交通結節点と文化遺産）」という授業があったその日は、「なぜソウル駅舎は残されたか」という質問を投げかけ、130 人くらいの受講生が、その場でレスポンスしてくれました。出席をチェックする目的ではありませんでしたが、授業や、授業で訪れた場所に関して、ツイッター感覚でコメントをつぶやいてもらうようにしたのです。この「つぶやき課題」は学生から評判が良く、「この課題が楽しかった」というコメントをたくさんいただきました。これも一つの工夫だったかなと思います。

あとは、学生に負荷がかかることを承知しながらも、授業の最初と最後だけは、全員がビデオをオンにすることを勧めました。最初に挨拶をして、最後もみんなで手を振って終わるということで、この授業に参加している実感を確認できるように、という意図がありました。

このような授業から、より良い授業を行うためのヒントも得ました。将来、教室で対面授業を行う際にも、ソウルに留学中の学生とオンラインでつないで、現場で中継してもらいながら授業を行うこともできると思いました。

不安な日々の中で、オンライン授業が心の支えに

授業の終わりには、Google Classroom コメント機能を使い、授業に対する感想や意見を自由に述べるように指示しましたが、約 130 人から回答がありました。「グローバルシティ・ソウルを読み解く」という授業の本来の趣旨に賛同し、評価するポジティブな意見が多かったのですが、素直にうれしかったのは、「楽しかった」というコメントでした。私自身、春学期は毎日テレビなどの情報に接しながら不安な日々を過ごしていましたので、この授業を教えること、あるいは、この授業をつくっていく経験を通して非常に励まされました。学生たちもおそらく同じような気持ちで毎回授業に参加していたと思います。

ぜひ、対面授業になっても、教室の中でオンラインを取り入れ、活用することを続けていきたいと考えています。このたびのオンライン授業は、新しいチャレンジではありましたが、いい時間でした。以上で私からの報告を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

飯島（司会） ありがとうございます。Google マップのストリートビューは、学生にとって教室のスクリーンよりも臨場感があったでしょうし、オンラインの利用は、こ

うした仮想体験の可能性も高めるのではないかと思います。また、「つぶやき課題」は、学生のコメントや考えをリアルタイムで確認し、授業反映する取り組みとして参考になりました。

次に、外国語教育研究センター准教授の芝垣亮介先生に、ご報告をお願いしたいと思います。芝垣先生は、本学で英語の授業をご担当いただいているのはもちろん、英語教育研究室の主任として、英語教育に関わる責任者もされています。どうぞよろしくお願いいたします。

3. 事例報告「英語」におけるオンライン授業

芝垣 亮介（全学共通カリキュラム運営センター英語教育研究室主任
／外国語教育研究センター准教授）

オンライン化による「違和感」から物事の原点を考える

全カリで展開している英語の授業のコーディネートしております、英語教育研究室主任の芝垣と申します。どうぞよろしくお願い致します。

オンライン授業が今回テーマと聞いたとき、非常に新しいテーマ、今どきのテーマが来たなと感じました。同時に、一種の違和感というか、不気味さも感じました。

「オンライン〇〇」という名前の活動が、今はたくさんあります。例えば、「オンライン飲み会」「オンラインライブ」、そして私は来月「オンラインクリスマス会」にも呼ばれています。このように今、「オンライン〇〇」は、世の中にあふれているわけです。この「オンライン〇〇」という言葉は、一種の軽さ、不気味さを携えているのではないかと思います。しかし、ここに不気味さや違和感を感じることは、いろいろな物事の原点と向き合うチャンスでもあると思っています。

その違和感はどこから来て、どういったものなのか、そして、「オンライン〇〇」がどういうふうにご利用できるのかを考えることで、新たな発見と可能性が見えてくるのではないかと考えています。

本日は、言語の授業での経験を通じて、この違和感についてお話をしてみたいと思います。まず「授業の実態」を2点ほどご紹介し、その次に「授業におけるオンラインの活用方法」をお話ししまして、「オンライン授業も捨てたものではない、なかなかいいんじゃない？」というところを、お見せできたらと考えています。



芝垣 亮介

出席率向上と資格系科目申請者の増加

まず、英語におけるオンライン授業の実態の1点目は、圧倒的な出席率が挙げられます。はっきりとしたデータはありませんが、言語系の授業においては、90%を優に超える出席率といわれています。大学生は授業に出るのが本職なので、出席率が高いのは良いことなのですが、この高出席率には一種の違和感、不気味さも感じながら、驚いている次第です。しかしこの出席率を見れば、オンラインはなかなかいいのではないかと。分析をすれば、それは通学がなくなったせいだとか、いろいろな理由があるかもしれませんが、実態として、そういうものが挙げられます。

次に、英語には、全員が必ず取らなければならない必修科目とは別に、自由科目があります。自由科目は、主に2～4年次生の、取りたい人だけが取る類の授業です。この自由科目の申請者数は、昨年2019年度は大学全体で1,405人だったのですが、それが今年2020年度は、1,682人に増えました。20%の増加率です。これは、オンライン化の恩恵としか考えられません。またその理由には、新座と池袋の両方のキャンパスの物理的障壁が取れ、どちらの授業も取れることになったこともあります。このデータだけを見ると、学生が自由にいろいろなキャンパスの授業が取れて良かったな、という話で終わりそうですが、もう少し細かく見てみましょう。

英語の自由科目は、自由に取れる科目ですが、その中でも、TOEICやTOEFL、IELTSのスコアアップのために必要な英語スキルの向上を目的とした資格系科目と、そうではない科目の2つのタイプがあります。資格系以外の科目も、もちろん英語の授業ではありますが、例えば、世界遺産や日本の文化を世界に伝えるなど、少し専門に近いような内容も入ってきます。

資格系科目の申請者数は、昨年度の739人から、本年度にオンラインになってからは1,081人と、およそ146%の増加です。その一方で資格系科目以外、より専門性を帯びた科目は逆に減っており、全体の増加にもかかわらず、マイナス10%となっています。これは非常に興味深いデータで、さまざまな分析方法があると思いますが、今回オンラインになったことで浮き彫りになった数値だと考えています。

この数値から明らかなように、2年次生から4年次生まで、より資格系の科目を取りたいと希望していることは明白です。しかし定員は、資格系の科目は975人、資格系以外の科目は1,360人となっており、大学や教員としては、資格系以外の科目を、もっと取ってほしいという思いもあるわけです。そこのずれが、今回のお話のテーマでもある「違和感」を感じる部分だと思いますが、これは興味深い数値なのではないかと考えております。

「英語ディベート」授業におけるオンラインの活用方法

ここからは授業の実態を少し離れ、オンラインになってから、英語の授業でどんな

いことがあったのかをお話ししてみたいと思います。

「英語ディベート」という科目を例にお話しします。この授業は、今年度から1年次生の必修科目として始まったもので、立教大学の一つの売りの科目です。全学部の1年次生が必修として履修するディベート科目として売り出している、そういう類のものです。

では、「ディベート」とは何なのか。ディスカッションや、コミュニケーション系の科目とどう違うのか？ということについて簡単に説明いたします。

ディベートの授業では、1クラス20人を「肯定チーム」と「否定チーム」に5人ずつに分かれます。そして、「ジャッジ」と呼ばれる人たちが10人くらいいます。

裁判を想像していただくと、分かりやすいと思います。例えば弁護側と検察側、そして裁判官がいます。お互い（弁護側と検察側）に議論し、判断する人（裁判官）がいるというものです。最初から役割が割り当てられ、個人の感情を抜きに行います。例えば弁護士が「被告人は多分犯罪を犯しているだろうな」と思っても、弁護をし続けなれないといけないわけです。それと同じように、自分の割り当てられた役割を果たし続けるのがディベートです。

次に、ディベートの流れですが、前半と後半に分かれています。まず始めに、「肯定チーム」と「否定チーム」がディベート（討論）を行います。前半のディベートの後に、作戦タイムが10～15分ほどあります。その後、前半部分のディベートを受けて、後半のディベートに移行します。

実際の対面型授業であれば、前半と後半のディベートの部分が授業のメインになります。しかし今回オンライン授業では、意外なことに作戦タイムや最後の判定タイムの教育効果が非常に大きいことに気付かされました。

対面型授業では、作戦タイムや判定タイムは教室の端のほうにチームごとに集まり、相手チームに聞こえないように小声でひそひそと話し合います。そのとき「ジャッジ」の人たちはただ待っています。

ところがオンライン授業では、ボタン一つでパッとそれぞれのチームを、ルーム1「肯定チーム」、ルーム2「否定チーム」、ルーム3「ジャッジ」と割り振ることができます。これは一瞬のことです。教員はどの部屋にも入ることができます。

例えば、前半のディベートが終わった後の作戦タイムの15分間に、それぞれチームごとの部屋に分けます。すると「肯定チーム」「否定チーム」は、それぞれ「後半どうしよう」と相談するのですが、その話し合いの声か、お互いのチームに聞こえる心配は全くありません。そしてそれだけではなく、教員はどこの部屋にも入れるので、ルーム3の「ジャッジ」にももちろん入れます。この「ジャッジ」の部屋に入ることは教育効果がとても大きいと思いました。

これはどういうことかということ、ルーム3では「ジャッジ」の人たちが、前半部分のことについてみんな感想を言い合っているわけです。例えば、「誰々のここが良かった」「ここはむしろ聞き取りにくかった」「こういう内容が良かった」「こういうところは数

値があったので良かった」「否定の方が良かった」などと。「肯定チーム」「否定チーム」に聞こえることがないので、忌憚なき意見が言えるんですね。それぞれの学生が言ったコメントについて、教員が「私もそう思うよ」とか「私はむしろこう思ったよ」というやりとりをすることができます。そうしてフィードバックできることによる教育効果が大きく、これを重ねることでディベートの質が一気に上がるのです。同様のことが最後の判定タイムでも言えます。

最後の判定タイムの15分は、「ジャッジ」の人たちが、ジャッジした内容を紙に書きます。その間、「肯定チーム」と「否定チーム」のところに私が入り、「今日のディベートはどうだった？」と感想を聞きます。これはオンラインだからこそできることです。終わった瞬間にリアルタイムで、今行ったことについての感想を話すことができます。これはまさにオンラインの大きなメリットだったと感じております。これは対面になったらできなくなってしまうので、どうしようかなと思うほどです。

オンラインのメリットについては挙げればきりがありません。その他には、例えば会話系の授業なので、本来ならよく喋る学生、英語のできる学生がどんどん喋ってしまい、引っ込み思案の学生が喋れないということが起こります。しかしオンラインの場合では、それぞれの学生がミュートを解除して話すので、割と均等に話す時間が割り振られます。オンライン授業には、まだまだ可能性があると思うので、皆さんで意見を交換して、もっと良いものがつくれたらと思っています。簡単になりますが以上です。

飯島 (司会) ありがとうございます。出席率の高さやディベートにおけるブレイクアウトルームの効用についてご報告いただきました。それでは引き続き、「宇宙の科学」という科目をご担当いただいています、兼任講師の中村雅人先生にご報告いただきたいと思います。よろしく願いいたします。

4. 事例報告「宇宙の科学」におけるオンライン授業

中村 正人 (全学共通カリキュラム運営センター兼任講師)



中村 正人

図や写真を多用してのオンライン授業

中村でございます。私は本職で宇宙科学研究所で金星探査機のリーダーをやっております。

昔、東京大学で学部生を教えていたころは板書でした。その後、大学院生を教えていたころは OHP (オーバーヘッドプロジェクター) を使っていました。そして、だんだんとパワーポイントに変わってきて、授業の内容を、プロジェクターで見せることができるようになっていき

ました。今回のオンライン授業に関しては、それをそのままオンラインで映せばいいということで、あまり違和感はありませんでした。

理学系では、セミナーもパワーポイントを使って行います。最近では、セミナーは全部オンライン化されていますし、研究会もオンラインでされていますが、大きな問題は生じておらず、私もそれほど困難は感じていませんでした。

私は「宇宙と科学」という授業を受け持っておりますが、この授業は4コマあり、私は特に「太陽から吹き出すプラズマ」について授業を行いました。「太陽から吹き出すプラズマ」を太陽風といいます。太陽風が、太陽系のさまざまな惑星大気や電離層、磁気圏と相互作用するさまを解き明かしていくという内容で、14回の授業（2020年度春学期は新型コロナウイルス感染拡大の影響で12回に変更）で、太陽のことから始めて、地球、木星、土星、火星、金星、水星などの相互作用を一つひとつお話ししていくということにしておりました。

履修者の急激な増加とレポート・試験の採点方法の工夫

授業の形式ですが、Google Meet とパワーポイントを使って授業をいたしました。オンラインできちんと配信されているかが不安なので、パソコンの横に iPad を置いてモニターしながらやっていました。

履修者は、教室で授業を行っていた昨年度は85人でしたが、実際に出席するのは60人くらいでした。ところが今年度は、履修者が200人にいきなり増えました。履修者が増えたことで、レポートと試験の採点がものすごく大変になりました。

オンラインになったことでの変化としては、学生の皆さんはミュートにしているので、私がくだらない冗談を言っても反応が分からず、冗談を言う数が減ったのではないかなと思っております。また、学生からチャットで質問されても、気付かないということが起きてしまっていることもあります。

レポートと試験は、採点しなければならない数が多すぎて、あまりまともにチェックできませんでした。そこで、レポートは、文字数を減らしました。例えば昔は3000字以内だったのを、1000字ほどに下げ、最後のころには600字にしました。文字数を少なくしたことで、冗長だったレポートが引き締まってきたかなという感じはあります。

小テストは、形は変わりませんが、昨年までは手書きで解答された用紙を、目で見て採点していましたが、今年はパソコンによる自動採点にさせていただきました。

これまでは文章中に設けた空欄に直接解答を書き込むという、穴埋め形式でした。今年度は、穴埋めする空欄に [A] と [B] など、アルファベットを割り振り、そこに解答を入れていく形式にしました。オンラインで解答するので、すべて自動採点することができ、大変楽になりました。

兼任講師ならではの苦労についての報告をリクエストいただきましたが、あまり思い

付きません。学生のレベルが評価しきれていなかったこともありましたが、3年間やってきて、だいたいレポートや試験で分かったので、毎年変わらないであろうということで授業をしております。

理学系におけるオンラインのメリットとデメリット

オンラインだからできたことについては、我々理学系の場合は、あまりありません。学生と教員との関係も変わらないと思います。ただし、オンライン授業では、学生はスライドを手元で非常に鮮明に見ることができたと思います。対面授業でも、それぞれ手元にパソコンを置いてスライドを見たほうが見やすくてもいいかもしれないと思います。

また、オンラインでは、板書で汚い字を書かずに済むのも良かった点です。しかし黒板での板書にもいい点があり、それは間が持つということ、そして、書くことによって、時間の変化を表現できることです。つまり我々は、定常ではなく非定常の物理現象を扱っておりますが、だんだん時間が変化していくわけです。例えば、地球の磁気圏と太陽風が相互作用して、はじめはこうなっているのが、だんだんこうなっていくんだよ、というようなことを、黒板だと書けるのが、オンラインではそれができないということです。それから対面ではコメントカードを集め、それを出席点としていましたが、今年は、当初はやり方が分からなかったで、全部昨年のもので(学生からのコメント)を使いました。

どのようなコメントかというと、「東京でもオーロラが見られるようにならないか?」とか、「ギリシャの人は、オーロラがなぜ赤いと思ったのか?」という質問に対して、写真や図を用いて回答しました。「オーロラが見えやすいのはカナダですか?」という質問に対しては、その通りカナダが見えやすいのですが、企業(クラブツーリズム)のホームページから画像を借りて表示し、回答しました。「数々の不安定」については、小さな図を用いて解説しましたが、手元のパソコン画面だとよく分かるのではないかと思います。

授業に関係ない質問も来ておまして、例えば地球の温暖化についての質問もたくさん来ました。毎年新たな質問が来るのが楽しかったのですが、今年は集められず昨年のもので使いました。来年はちゃんとコメントカードを集めたいと思っております。

まとめですが、オンラインでも対面でも、若い人に教えるのはとても楽しいことです。でもやはり、学生と教員、学生同士のコミュニケーションがないというのがオンラインの最大のデメリットで、学生の人間的な成長に悪い影響があるのではないかというのも、少し懸念するところでもあります。以上です。どうもありがとうございました。

飯島 (司会) ありがとうございました。履修者の増加や、パソコン画面が目前にあることで、資料等々を鮮明に見るのに役立つというご意見をいただきました。

それでは最後になりますが、法学部教授で、現在法学部長を務められています小川有美先生にご報告をお願いしたいと思います。小川先生は、第一次遠隔授業活用検討ワー

キンググループの座長を務められていまして、本学のオンライン授業の在り方に関する一つの方向を示すリーダー役を果たされてきました。今日もその視点からご報告いただけるものと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

5. 第一次遠隔授業活用ワーキンググループの最終報告

小川 有美（法学部教授／第一次遠隔授業活用検討ワーキンググループ座長）

第一次遠隔授業活用検討ワーキンググループ最終報告の概要



小川 有美

よろしくお願いします。本日は第一次遠隔授業活用ワーキンググループの最終報告の内容に沿ってお話しします。

この期間、学部長としては災害対策本部長のように毎日慌ただしく過ごしておりましたが、今日の先生方のお話をお聞きし、非常に生き生きとした教育が立教大学でなされていること、特に全力でなされていることを印象付けられました。

私の報告は、授業のオンライン化にあたり、そもそも制度的に、組織的に何を考える必要があるのかという少し地味なお話になりますがご容赦ください。

第一次遠隔授業活用検討ワーキンググループの最終報告で扱った議題は次のようになっています。

「第1次遠隔授業活用検討ワーキンググループ」 最終報告 2020.10.01

◇目次

- | | |
|-----------------------|------------------------------|
| ◇1. 「遠隔授業」についての整理 | ◇3. 遠隔授業の活用における課題 |
| ◇1.1. 法令等の観点 | ◇3.1. 教務事務に関する課題 |
| ◇1.2. 実態の観点 | ◇3.2. 環境整備（主にシステム、ネットワーク）の課題 |
| ◇1.3. 小括 | ◇3.3. 教員の給与・各種手当に関する課題 |
| ◇2. 遠隔授業の特徴 | ◇3.4. 教学条件に関する課題 |
| ◇2.1. 遠隔授業のメリットとデメリット | ◇4. おわりに |
| ◇2.2. しょうがい学生の遠隔授業受講 | |

まず、「遠隔授業とはそもそも何か」についてです。遠隔授業について、まず文科省等がどう定義しているか、何を求めているのか、そして実際立教大学でオンライン授業を実施するにあたりどういう形態があるのかです。例えば、遠隔授業を何回行い、対面授業を何回行うのか、回数によって判別されるのか、といったことを議論いたしました。

また、「遠隔授業のメリットとデメリット」についても検討いたしました。そのうち、しょうがい学生——視覚しょうがい、聴覚しょうがいや、四肢のしょうがいのほか、発達しょうがい、精神しょうがいといった学生もいます。それらの学生にとっての、遠隔授業のメリット、デメリットについても少し調査いたしました。

今後、遠隔授業を活用していくにあたり、教務事項に関する課題にはどのようなものがあるか。履修の制度をどうするか、システムやネットワークの環境をどうするか、といったこと。さらには教員の給与や出校手当といった人事的な課題もあろうかと、それについても検討しました。

そのようなことを検討しましたが、「大学としての方向性はどうか？」ということをししばし聞かれました。それについても触れていきたいと思います。

遠隔授業を法令の観点から考える

まず、法令等の観点で、遠隔授業はどのような扱いをされているのかについて確認しておかないとなりません。コロナ以前から、遠隔授業は法令上、大学設置基準等において定義がありました。

遠隔授業は、対面授業に変わる授業分類ですが、本来対面で行うべき教育の補完的なものと位置付けられていて、卒業要件単位の60単位を超えてはいけないということです。そしてどちらかという、対面授業に及ばない不完全な可能性のある授業と想定されているので、対面授業と同等の教育効果を持つように、いろいろとチェックポイントがありました。

これに対して、コロナ禍ではどうなったかという、感染拡大の中で、対面授業を予定通り実施するのが困難と認められる場合、60単位の上限に算入する必要はないという大きな変更がありました。よく「ウイズコロナ」とか「ポストコロナ」、また「遠隔授業の活用」などと言いますが、これは今後ずっと続き、全面展開するのか、あるいは時限的なもので、1、2年の例外状態で旧に復するのか、といったことは非常に大きな選択になります。これは法令や文科省・政府がどう考えるか、あるいは国会がどう考えるかにも関わってきます。

もし、60単位という上限が改めて維持されるのであれば、遠隔授業は60単位を超えて履修してはいけないことになってしまいます。このことを頭に置いておかなければなりません。

そしてもう一つは、著作権、知的財産権をめぐるもので、授業などで教材などを公衆送信することについてです。令和2年度については特例的に無償とすることが文化庁に

よって認められましたが、これが来年以降も続くのかどうかも確実ではありません。

対面授業に相当する効果が認められる必要としては、現時点では指導計画（シラバス）がきっちりしていることや、課題や出席管理がなされていること、学生一人一人へ確実に情報を伝達する手段、学生の相談に速やかに応じる体制が確保されていることなど、現在、立教大学で対応しているポイントが求められています。

しかし、何をもって対面授業というのか、1回だけ対面でも対面授業と呼ぶのか、半面でも対面授業と呼ぶのかといったことは、大学が実質的に判断し、責任を持って定義しなければならないであろうということになります。

オンライン授業だからこそ実現できること

制約だけ考えていても、活用、可能性はあまりにも狭くなるので、どうやって活用していけるかということ、ワーキンググループで議論しました。そこで出た結論は、まずオンライン授業を増やせばいいということではなく、質が重要であり、オンライン授業でこそ実現できる価値を伸ばすことが、真の活用であるという、当たり前といえば当たり前の結論に至りました。

「オンライン授業でこそ実現できる価値」とは、具体的には国外の講師や企業などの講師、ゲスト・スピーカーに委嘱すること、海外協定校との合同授業を企画すること、また、全面遠隔授業での課程を実現できることなどが考えられます。これは社会人やリカレント教育、あるいは国外から受講する学生にとっては、非常に魅力的なものになるでしょう。例えば法学部では、シンガポール経営大学と交換協定を結んでいます。現在のコロナ禍で、バーチャルあるいはオンラインでの授業の交換、単位の付与といったもの、あるいはカリキュラムを合同で開発していくことができないかといった提案を受けています。すぐに応じられるかは分かりませんが、そうした具体的な話もあります。

オンラインを使って何ができるかということについては、本日お話にあった Google マップのストリートビューや、ディベートなども大変魅力的ですが、そうしたさまざまなイノベーションが、各学部、各研究科、各教員の取り組み、またもちろん全カリからも生まれています。そういった創造性は、それぞれ個性的なものだと今日のお話からも、よく分かりました。それができるために足かせにならないよう、むしろ支援するような体制を大学がつくっていく必要があります。

そしてもう一つは、オンラインで結ばれる可能性を生かして、1年次生から大学院生まで、多様なメンバーがネットワークをつくっていける可能性もあります。大教室で授業を受け、学生同士のネットワークは課外のサークルだけというようなイメージを超える大学が生まれるのではないかという期待があります。

しょうがい学生にとってのメリットとデメリット

しょうがい学生についてですが、大学に来ること、教室に長時間滞在することに困難を感じるしょうがい学生は、その負担が軽減されました。また、視覚しょうがいを持つ学生は、オンライン授業では読み上げソフトをそのまま使うことができます。そのように、しょうがいに合わせた学び方の工夫ができたというメリットが報告されています。

他方で、例えば、聴覚情報処理が苦手、光過敏等の学生など、それぞれのしょうがいの性質によっては、オンライン授業が受講しづらく体調不良につながることもありました。

オンライン授業では、科目によってウェブ会議システムや授業支援システムがそれぞれ異なるので、対応が難しかったり、課題があまりにも多いので取り組みを忘れてたり、心身の不調が生じたりするということがあります。教員とのコミュニケーションが難しくなる、あるいは他の学生との交流が少なくなって必要な情報や人間関係を得ることが難しくなるといったことも。これらはしょうがい学生ではない学生にもおそらく共通するデメリットです。しょうがい学生にとっては、それがより鮮明に現れるということもあります。

学生の不満や孤立の問題

次に、「遠隔授業の可能性と課題」についてです。当初、遠隔授業は感染予防のための対面授業の代替手段と位置付けられました。これまでにない、空間的、時間的な制約を取り払った教育の可能性をもたらさだろうということですが、すでにその経験をもたらしています。したがって、これらの経験を吸収した大学は期待を背負うことになり、国内外との競争の時代に入ることも予想されます。

ただし、授業のオンライン化にあたって懸念される点もあります。立教大学は大学教育開発・支援センターを通じ、学生向け、教員向けに、オンライン授業についてのアンケートを実施しましたが、今後のオンライン授業の受講希望について、「希望する」と答えた学生は4割にとどまり、「希望しない」と答えた学生は6割に上りました。特に深刻なのは1年次生の不満や孤立です。7月くらいの段階でしたが、1年次生の約4分の3が、「オンラインを希望しない」と答えました。これは、「オンラインバラ色論」に対して冷や水を浴びせるものですが、この原因が何かを解きほぐしていく必要があります。

例えば法学部のデータを見ますと、一番不満が多いのは、「課題の量が多すぎること」です。これはオンラインだからではなく、課題量の調整が必要ということかと思えます。それから、学生の孤立は非常に深刻で、1年次生は大学に来られず、友達もできない。友達ができないというのは、遊べないということだけではなく、授業の不安や、ちょっとしたヒントをもらうこともできないということです。これは本質的に深刻で、こうした悩みを抱える学生に対して親子面談をさせていただいたこともあります。

オンライン化にあたり執行部を悩ませた問題

ここで、遠隔授業の可能性と現実の教員とのほごまについて考えたいと思います。これは、報告書の紹介とは別に、余白で付け加えさせていただくものです。

立教大学は素晴らしい人材を擁していて、そこには専任教員も兼任講師も含まれます。全カリも多くの兼任講師によって支えられているかと思います。私からは、法学部での経験についてお話しします。

まず「教員にどうオンライン授業を実施してもらおうか」です。そもそも当初は、Zoom なんてはじめて聞いた、という状況だったので、「オンライン授業支援ワーキンググループ」を学部内に立ち上げ、学部事務や教務、そして学部、教員との間に入ってもらいました。このワーキングを通じて授業の練習をしてもらったり、相談を受け付けてもらったり、メディアセンターにも協力してもらいました。その部分に関しては、立教大学は、すべての学部・部局も含め、きめ細かい対応をしていると思います。しかしそれでも、兼任講師に非常に細かい依頼や説明をするのは、容易ではありません。

また学生も教員も不便に感じているのが、授業支援システムの多様化です。先ほどお話がありましたように、Blackboard や立教時間、Zoom や Google Meet などの多元素性がうまく生かされていればいいですが、先生ごとに違うものを使うので、学生からは「非常に戸惑う」という声が寄せられました。少なくとも、授業支援システムについては、統一されることが望ましいと思います。

それから、オンライン授業や動画によるライブ、もしくは録画の配信が、どうしてもできないという教員がいます。これは、余人をもって代え難い科目の場合は、非常に困難なことになります。法学部の場合は、毎週執行部の教員や事務の方がシフト制で担当し、学内でパソコンを立ち上げて、講師に対して細かく手助けすることをやらざるを得ない科目もありました。

学生のマナーの問題もあります。学生が、Zoom 荒らしのようなことをやることもあります。学生がネットの書き込みのような形のクレームを書き込んだことがありました。非常に失礼ということで、兼任講師の方が大変不快な思いをされているという報告も受けました。

ミックス型の授業が要望されていますが、本当にいかなる授業でもミックス型で対応することができるのか、ミックス型にすると言ってしまってもよいのかも問われます。

そして、成績評価方法の多様化で、レポートや筆記試験などの方法が変わってきたこともあります。法学部専門科目や全学共通科目「学びの精神」では筆記試験が中心でしたが、これを急遽レポートに変えたことでいろいろな新しい問題が生じました。例えば学生たちが仲間同士で教え合う、写し合う、また、本人が許可していないのに第三者を通して他人のレポートを写してしまうといった場合など、何をもって不正行為とするのかは、この春学期末、我々学部執行部を悩ませた問題でした。

大きな課題意識を持って協力していくことの大切さ

キャンパスでも、オンラインでも、どちらでも「行きたい」と思ってもらえる大学が望ましいと思います。今日うかがったように、いろいろな授業の工夫があることが分かりましたし、グッドプラクティスが共有されていることが、もちろん望ましいと思っています。

例えば、アメリカですでになされている「反転授業」が良いといわれますが、実際に何をどうやると効果的かということが、共有されるといいかと思えます。

コロナについては、リスク意識が、親によっても学生によっても大きく異なるので、あらゆる人々からの要望や質問をどう汲み取り、どう応えていくかということは、時間やコストがかかることであると思っています。京都大学の元総長であり、日本学術会議の会長を務められた、ゴリラ研究の第一人者の山極寿一さんは、オンライン授業には若干消極的です。オンラインでは、新たに仲間をつくるのが難しく、学生がなぜ大学という場に集まるかという、仲間と一緒に学ぶためだ、と言っているらしいです。その仲間づくり、ネットワークづくりについては、本腰で考えていかなければいけないと思っています。

そしてまた、このコロナ禍で、立教大学の理念である「PRO DEO ET PATRIA」（神と国のために：普遍的なる真理を探究し、私たちの世界、社会、隣人のために）という大きな課題において、各学部、全カリ、学生たち、そして私たち教員が何を考えていくべきなのか。そうした大きな課題意識を持てたらいいなと思っています。私の報告は以上です。

飯島（司会） ありがとうございます。小川先生からは大学全体、あるいは法学部の学生がどういう行動をとったかというご報告もいただき、オンラインの負の側面についても、言及いただきました。オンライン授業活用の要は「質」にあるというご指摘は、本日のテーマにも通じているものと思います。

それでは、これからパネルディスカッションに移りたいと思います。その前に現在ご視聴いただいている異文化コミュニケーション学部助教の小峯茂嗣先生から、ご担当されたオンライン授業についてご紹介したいとの申し出をいただきましたので、ご発言いただきたいと思います。では小峯先生、ご報告よろしく願いいたします。

6. 事例報告 オンラインによる海外フィールドスタディ

小峯 茂嗣 (異文化コミュニケーション学部助教)

現地と築いた信頼関係がオンライン化の鍵に

異文化コミュニケーション学部助教の小峯と申します。異文化コミュニケーション学部では、「海外フィールドスタディ」という科目を置き、現地に学生を10日間ほど連れて行って、実地で学ぶプログラムを実施しております。昨年度は、アフリカのルワンダに学生を引率しましたが、今年はコロナによってそれができなくなり、現地とオンラインでつながって行うプログラムとなりました。



小峯 茂嗣

大学全体でも海外留学が行われていますが、この「海外フィールドスタディ」は、それと並ぶ広い意味でのグローバル教育の一環です。大学の海外留学では、主に都市部で活動しますが、異文化コミュニケーション学部の「海外フィールドスタディ」では、もっとローカルな現場に行き、現地の人たちと触れ合いながら学ぶことをやっています。私はこれまで、開発協力と紛争、平和構築の問題について学生に指導を行ってきました。

画面共有させていただき、活動の一部をお見せしたいと思います。これはルワンダの大虐殺の追悼施設です。これは、リアルタイムで現地と学生がつながり、現地を見学している様子です。これも農村のほうで、現地の協力者にスマホで実況中継をしてもらい、学生たちはリアルタイムで現地の人たちの話を聞くということをやっています。これは、村歩きをしているところです。これは、学生が現地の農村の小学校の校長先生とリアルタイムでつながり、直接、教育事情について質問している様子です。

このように、リアルタイムで現地とオンラインでつながりながら授業を行っています。もちろん実際に現地に連れていくのには及びませんが、留学や現地実習ができない中で、いかに現場について皮膚感覚で学んでもらえるかという取り組みをやってきました。

苦労した点はネット環境です。アフリカはネット環境が悪いのでときどき途切れることもありましたが、今ご覧いただいたようにそれなりにちゃんと対話はできました。

私はこれまで25年ほどルワンダに関わってきました。現地での土地勘があり、どれくらいの時間でどれくらいの学びを得られるかを感覚として分かっていたために、こうした授業を実現できました。それがないとなかなか難しかったと思います。

また、現地の方との信頼関係も大切です。現地のインフォーマント(情報提供者)に対して、戦争のときの被害などの話も聞かないといけません。それは私の築いてきた信頼関係をベースに行いました。その信頼関係がないとなかなか効果的な学びができな

かったかと思えます。

制約はありますが、学生からは、「現地に行けない中でも、それなりに臨場感を感じられた」という感想がもらえました。さらに、「コロナが落ち着いたら現地に実際に行ってみたい」という感想もあり、意欲を高めることもできたようです。私からの事例はこのような感じです。お時間ありがとうございました。

この件につきまして、朝日新聞*でも紹介していただいたので、あとでお時間あれば見ていただければと思います。

*「集団殺害の歴史の展示、体験者の証言……ルワンダから生中継でフィールドスタディー」<https://www.asahi.com/edu/article/13820338>

飯島（司会） 現地に行って学ぶことができない中、オンラインでどのような可能性があるのかというご意見、事例をご紹介いただきました。どうもありがとうございました。

7. パネルディスカッション

飯島（司会） それではここからパネルディスカッションを行いたいと思います。シンポジウムのタイトルが「オンライン授業の可能性」ですので、急遽それに迫られたオンライン授業が、現在改善を進めながら、対面に代わるような代替手段としての位置付けとなるのか、あるいは、別の次元で何か新しい可能性を秘めているのかが、最後に明らかにしなければいけないと思います。

まずは先生方にご報告いただいたお話を踏まえて、学生の行動や意欲、関心などが、オンライン授業の中で、どう変わったのか、どう高まったのかについて、何かご意見いただければと思います。

黄先生、学生のコメントなどもご紹介いただいたのですが、そのあたり、学生の意欲の高まりはオンラインだと大きく違うと考えてよろしいのでしょうか。あるいはどのように学生の関心の変化がみられたでしょうか。

黄 先ほどの報告でも申し上げたように、私自身がオンライン授業で学生と会うのを楽しみにしていたのと同じように、学生たちも、外出もできない、何もできない中でオンライン授業を楽しみにしてくれていたら、と思っていました。通常時と比較はできませんが、結果的により勉学に集中するという環境になったことがあると思います。

もう一つは、オンラインがいいのかオフラインがいいのかを考える必要性は全体としてはあると思いますが、一教員として、あるいは大学人としての立場では、ある意味原点に戻るといえるのか、どのような授業が良い授業であるかを考える良いきっかけになりました。

これまでのオフラインの対面授業でも、情報化ということで、さまざまなシステムが

発展してきましたが、実は本気ではなかったという面があったと思います。大学の情報化の在り方も、オンライン対応の在り方も、できないことがたくさんありました。今回、この非常事態での全面的なオンライン化で、これまでできないと言われていたさまざまなことが一気にできるようになりました。

これまでできないと言われていたことができるようになったのを、一つひとつ記録して改善していくべきだと思います。学生たちも、「本来、大学で学ぶということは、どういうことなのか」を、今回のオンライン授業の経験で実感するきっかけになったと思います。

課題の量が多かったという不満の声は、私も聞きましたが、本来このくらいの課題量でないといけなのですよ、というのをお互いに確認することになった、という見方もできるでしょう。

また、いろいろとできないことが多くなる中で、授業の準備に充てる時間が増えました。いかにより良く伝えるかという工夫をすることで、授業の内容が充実したと実感できるようにもなりました。

教室環境にしても、オンライン環境にしても、先ほど小川先生も指摘された、授業のサポートシステムの複雑化に関しても、こうすればいいのだ、ということが分かったことがいくつもあります。そうしたことをきちんと確認して、オンラインかオフラインかということではなく、どのようにして授業をより良い方向にもっていかを考える良いきっかけになったということ、我々がきちんと確認しておくことが大切ではないでしょうか。

飯島（司会） 急遽迫られた授業計画の変更の中で、我々自身がどういう授業が最適なのかというのを考えるきっかけでしたし、学生が大学に来られないという中で、大学とはなんなのだろうか、ということをも改めて学びたい機会だったというご意見をいただきました。芝垣先生はいかががでしょうか。

芝垣 今の黄先生のお話ともかぶるところがありますが、授業のオンライン化が授業の原点を見つめ直すきっかけとなったことを感じたことは事実です。その上で、春学期の英語自由科目では、授業の最初に、学生に「なぜこの授業を取ったのか」と聞きました。オンラインと語学の会話系の授業は、一番そりが合わないですね。それにもかかわらず、何を期待してこの授業を取ったのですか、と全員に、最初の授業でコメントを求めたのですね。

その答えで興味深かったのは、やはり「留学に行きたかった」という学生が一定数いたことです。留学に行けなくなったので、その代わりに、どうしても取ってみたいかたと言うのです。「もっと話す機会が欲しい」「もっとコミュニケーションする機会が欲しい」ということでした。そうしたことを求めて、英語自由科目を取ったと言っているのです。そういう意味においては、普段の対面授業では意識しないで流していたところを、

教員と学生の双方が、「なぜ私はこの授業を取りたいのだろう」「今、私は何を求めているのだろう」と、考えていたのだと思います。

「なぜこの授業を取ったのか」という点についても、しっかり確認をとった上で授業を行うことで、対面よりもモチベーションが高かったと思います。今、飯島先生からもお話があった通り、意欲が上がっていった部分もあったのではないかと考えております。

飯島 (司会) いつもと違ったニーズを持つ学生が授業を履修すること、ニーズをくみ取ることで対面よりも学習意欲を高めることも可能ということでしょうか。中村先生、小川先生はいかがでしょう。

中村 理系と文系はかなり違う感じがいたしまして、文系の方の話を聞くと、やはり学生とのコミュニケーションをどのように変えていくかということが課題かと思います。

理系の授業の場合には、我々教員のほうから学生に、知識をそのまま移すというところがあります。そこで不安に感じるのは、学生がオンライン授業に集中することができたかどうかです。私もオンライン会議の最中にマイクを切って、ほかのことをすることがあります。私の科目は金曜の1限の授業だったこともあり、学生は朝起きてきて、とりあえずオンラインのスイッチを入れるけれど、あとは聞いていないかもしれません。その点では、実際に教室に授業に出てきて集中してくれたほうが、ありがたいような気がいたします。

小川 オンラインで履修者が増えた、学習意欲が高まったというのも確かにあると感じています。もちろん、オンラインになって、私語が少なくなったというのもあると思います。他方では、目の負担が大きくなっているという問題もあります。学生からのアンケートには、「視力が、短期的ではなく、本格的に悪くなった」という声もあり、そうしたことは気にしておくべきかと思いました。

これからの大学教育がどうあるべきかについては、全力だけに必ずしも限定されない話ですが、やはり大学とは研究と教育の両輪であります。もちろん、最先端の研究成果をただ学生にぶつければいいという、もうそのような時代ではありません。しかしおそらく、「どうやって教えるか」だけの観点ではなくて、専任、兼任の素晴らしい研究者の先生方が真理の探究をされたものが、やがて、学生への教育に還元されるという、大きな川の流れのようなものが、そのためにはオンライン化を、研究の未来も含めた形で考えていくべきではないかと思っています。

我々は海外出張に行けなくなってきた代わりに、海外の学会にオンラインで参加できるようになりましたが、本来、大学とは「学問を教育する場」であるという視点が、やはり必要ではないかと思いました。少し抽象的になり、申し訳ありません。

飯島 (司会) ありがとうございます。研究での期待もそうですが、来年の授業計画を

作るなかで、教員側も希望や挑戦が出てきて、オンラインによる海外教員とのやりとり、あるいは海外教授も積極的に入れていったほうがいいのではないかと計画もあります。

ほとんどの海外実習科目が中止されるような状況では、今日、小峯先生にご提案いただきましたように、現地に行けない中で、どうやってリアルな感覚を学生に持ってもらうかについては、オンラインの可能性も非常に高いのではないかと思います。海外とつながる、という意味で、小峯先生から何かご見解があれば、少しおうかがいできればと思います。

小峯 通信環境は、先進国ではあまり問題ないと思います。途上国でも飛躍的に改善されています。といっても、都市部と農村部でも違うので、通信の速度の差はあるとは思いますが、徐々に改善されていくと思います。

あとは時差の問題もあります。ルワンダ（アフリカ）との時差は7時間なので、現地とつながるのは、日本時間の5、6限の時間でした。これはどうしようもないことですが、時差も意識しながらプログラムをつくる必要はあると思います。

今回、ルワンダとつないで授業を行ってみて、何より大事なのは、現地の人と、直接言葉を交わすことだと思いました。これはアフリカに限らず、アメリカでもイギリスでもフランスでもブラジルでも、どこでも同じだと思います。現地の人と言葉を交わすことによって、学生たちは、世界をより身近に引き寄せて考えることができます。その点はオンラインでも達成できたと思っています。やはり現地とつながる、対話する機会は非常に意義があるとは思いました。

飯島（司会） ありがとうございます。オンラインを前提にすることで、次年度以降は計画的に学んだり現地の人と言葉を交わす機会をつくることも容易になると思います。もちろん国内でも同じで、遠隔地にいる方々によって学生が刺激を受けることがオンラインによって可能になるのではないかと思います。

小峯 補足ですが、海外実習、留学はやはり学生にとって、費用も結構大きな負担になっています。そういう意味では、オンラインでは費用はかからず、それなりの経験ができるという意味での意義もあるかなと思いました。

中村 先ほど、時差の問題があるとおっしゃったのですが、逆に理系の場合には、地球の反対側が夜であるのを生かせると思います。例えばガーナに望遠鏡を持ち込み、星を見ながら授業をすることも可能で、それをやっている先生も実際にいらっしゃいます。そういう意味で、時差もデメリットだけではないように思います。

飯島（司会） ありがとうございます。質問がきています。芝垣先生がオンラインの利



点は限りない、とご発言されましたが、それについてもう少しかぎたいということです。もう少しだけご紹介いただければと思います。

芝垣 オンライン授業のメリットについて、2、3点、ご紹介できたらと思います。

まず一つは、チャット機能があるということです。これは、オンラインでは当たり前のことかもしれませんが、やはり授業で手を挙げて質問をするのは、特に200人という大勢の授業では、なかなか難しいことです。そんなときに、先生が「チャットで、プライベートな形で質問を送っていいよ」と言うと、割と質問がしやすいということがあります。コミュニケーションがむしろ取りやすくなっている部分が確実にあると言えます。

それから、特に語学授業では対話する必要があるわけですが、対面とネット上で話すのとの違いは、一つには臨場感があります。自分の周りの空気や雰囲気、周囲に置いてある物など、取るに足らないようなことかもしれませんが、人間とは、そうしたものをシェアして、コミュニケーションをとっています。それがあつたのとないのとでは、会話は大分違ってきます。それができないのがオンラインのデメリットだと思っていましたが、オンラインでも、その人のバックグラウンドを見ることができます。家にいるときに、オンラインでつなげば、例えば学生なら、ギターが置いてあったり、ボールが置いてあったり。生活の一部を垣間見ることができ、臨場感があるのですね。そうしたものを手掛かりにして話すことができます。臨場感はいろいろな出し方があるのでは、と思っています。

最後に、情報の使い方という部分ですが、学生はユーチューブなどもよく見ていると思います。視覚的に文字を読み取って情報を吸収する、画面を見ながら情報を吸収することに長けているように思います。

ですので、教員の側も少し工夫することで、今までよりもっと教育効果の高い、教員の側がいいというものではなく、学生の側がいいと思うような情報の吸収の仕方みたいなものも提供していけるのではないかと思います。

そしてもう一点ですが、先ほどのバックグラウンド、家の物が画面上で見えるということに関しては、プライバシーやコンプライアンスがうるさい時代で、いろいろと問題もあると思います。しかしそれは、教員と学生との間で、信頼関係が築かれていることが前提として必要です。では、この信頼関係の構築をどう行うのか……より良いオンライン授業を行うにあたって、この問題が根幹にあります。やはりオンラインが対面に若干劣るかもしれない、危ないかもしれないというポイントはそこだと思います。学生との信頼関係をうまく対面でまとめて築き上げられれば、そのあとは対面授業と変わらない質の高いオンライン授業ができるのではないかと感じております。

飯島（司会） ありがとうございます。今、芝垣先生のお話の中にもありましたし、大学教育開発・支援センターが実施したアンケートの中にもあったのですが、オンライン化によって、学生と教員とのコミュニケーションが取りやすくなったという場合と、逆に取りにくくなったという、相反する学生や教員からの反応がありました。学生同士がオンラインでやりとりをするときも、対面のときよりも質の高いコミュニケーションができるという意見と、逆にちょっと喋りにくいという意見とがあったと思います。その点で、小川先生、全体的に見てオンラインの良い点、悪い点をどのように理解したらよろしいでしょうか。

小川 そうですね。今日いろいろな工夫ができることが分かったので、やりようだなと思います。芝垣先生のお話をお聞きして思ったのですが、やはり人間関係は一次的な部分と、二次的な部分とがあります。一次的な部分とは、プレゼンをするとか、討論をするとか、目的に即して、あるいは評価をされるような場で行うコミュニケーションです。求められていることをやるということですね。しかし、そうではない、二次的なコミュニケーションもあります。先生や友達と、ちょっとした、たわいもない話することや、それまでお互いに知らなかった学生同士が、なんとなく仲良くなるためにするコミュニケーションなどです。コミュニケーションにはその二層があると思うのです。オンラインでは二層部分がなくなり、一層だけになる辛さがあるだろうというふうに思います。

飯島（司会） 黄先生からもグループワークの効果についてご紹介いただきましたが、その点对面と比べるとオンラインの良さはありますでしょうか。

黄 私が授業のお手本にしているのは、学生時代に受けた韓国の延世大学の社会科学部の数百人規模の授業で、小グループに分かれて行ったものです。それは、ちょうどアメリカのバークレーなどで、さまざまな社会運動が大学に入ってきたころの実験的な授業スタイルだったようですが、要は、受講者が数百人であっても小グループに分かれ、グループワークをするという形式です。そのようなことができないかとずっと考えてきま

したが、立教大学の大規模講義ではなかなか難しかったんですね。

大きな教室で4、5人でグループを組織することができなかったのですが、このZoomのインターフェースだと、自動的にグループに分けることができます。今回はやむを得ずオンラインになり、Zoomの環境に身を置くことになりましたが、結果的には、授業のデザインを良い方向に変えることができたんですね。学生たちもまた、やはり誰かと話をすることに飢えていたというか、そういう環境のもとにいました。ある意味、非常事態の中で、ああ、こういうふうグループディスカッションをするといひね、ということに改めて気付かされることになったんだと思います。

ですから、今回の経験を、オンライン、オフラインという観点から考えるのではなく、「正反合」というか、正に対して反があったけれど、それを総合する経験にしていく必要があると思います。例えば、来年度の授業で小グループのディスカッションを設計しようというとき、それをどうしたらできるのかを考え、場合によっては、教室の中でオンラインの力を借りることはできないのだろうかとか。バーチャルなグループをつくることも、オンラインではできるんですね。

今回の経験を、非常事態の経験で終わらせず、通常の経験と総合していくことが重要です。さまざまな改善を、大学全体として、そして教員も個々人もやらないといけないと思います。この経験を忘れてしまうのはもったいないですね。

飯島 (司会) 黄先生のご発言の中に、大規模でできなかったことが、小規模に分けることで可能になる部分があるというご意見がありました。小峯先生からは、海外に行く代替というご意見もありました。学生の中には、大規模な授業の中で知識を習得するという限りにおいては、オンデマンドを使って繰り返し復習することで、時間が有効に使えるという意見も出ています。オンラインが適している形態について、ご見解があればうかがいたいのですが、いかがでしょうか。

小川 立教大学も学部が多様性がでてきて、非常にインテンシブな教育をしている学部がある一方、法学部をはじめ、依然として200～500以上も席があるような大教室で授業を行っている学部もあります。それには学問的な特性もありますが、やはり授業の間きやすさや私語の問題も考えると、大教室の授業は、オンラインに向いていると言えると思います。

黄先生がおっしゃった、授業の最初と最後に学生が顔を出すとか、ちょっとクイズをしてみるといったことのように、多少インタラクティブな要素があったほうが良いという声もあると思っています。ではそれ以外の、中小規模の授業では、オンラインと対面のどちらがいいのか。これはやりようだと思います。対面でゼミをやる良さもありますし、ブレイクアウトルームなどを使ったり、発言が均等にできたりするメリットもあるので、オンラインでやることもありなのだなと思います。

第一次遠隔授業活用検討ワーキンググループでは、オンライン化によって、学生の定

員を増やすことができ、キャンパスの空間的な制約を乗り越えられるということを少し検討しました。しかしこれは、法令上の問題などもあるので、まだ将来的な検討ということになります。

飯島（司会） ありがとうございます。一概に何がいいということではなく、使い方を教員の側も、学生の側も、うまく学んでいくことでより良い形ができていくのではないかと思います。それでは最後に、オンライン授業の可能性について先生方から一言ずついただいて終わりにしたいと思います。黄先生からお願いできますでしょうか。

黄 「総合する」という意味で、オンライン授業でさまざまな可能性に気付いた、あるいは何をすればいいかが分かってきたということがあるので、今後はそれをぜひ生かしたいと思います。これまでできなかったこと、「システムの難しい」と言われ続けてきたことが、いくつもできるようになったんですね。これを決してもとに戻さないことを強くお願いしたいし、私自身も原点に戻って、より良い授業をしていかなければならないという教訓を得たと思っています。

飯島（司会） できたこととできなかったことについて、改めて考えて、より良いものをつくっていく心掛け、働きかけが必要なのかなと思います。中村先生いかがでしょうか。

中村 今、いろいろとお話を聞いていて思ったのですが、我々のような理系の授業は、知識を淡々と学生に教えていくものなので、これはもしかしてビデオを事前に撮って、それを流している間にチャットで質問を受け付けることなどができれば、教育の可能性が広がると思いました。ですので、そうした可能性を含んだオンライン授業を、これからいろいろ考えていければいいと思います。

芝垣 今さっきの小川先生のお話で、特に大教室において、オンラインはメリットがあるのではないかとということですが、私もそう感じております。

さらに言語系の科目でいうと、人数が少なくなればなるほど、オンラインの授業は対面に近づいていくのではないかととも言われております。かなり人数が減ってくれば、学校に来る必要はないとまでは言いませんが、オンラインの良さが大きく出てくるのではないかという意見があります。

まだまだ私たちはオンラインの授業のことを勉強中だと感じています。言語とオンラインという、もっとも合わなさそうなペアにおいても、これだけメリットが出てきているので、オンラインと対面とのいいところ取りをする形で、もっと質の高い授業、もっと学生に対していい教育ができることを、これから考えていけるのではないかと考えております。

小峯 海外に限らず、現場での実体験を伴う教育に携わっていた立場から言うと、オンラインは実地に連れていくことに比べればできないことだらけで、やっけていてももどかしいところがたくさんあります。5Gが導入されインターネットの通信がどれだけ早くなっても、やはり現地の匂いや皮膚感覚、ムワッとまとわりつくような空気感などは伝わりません。そういう意味では、オンラインには限界があります。しかし限界がある中でも、海外、あるいは国内でも移動が制限されている中で、何もやらなければどんどん内向きになってしまい、思考がタコツボ化していくのではないかと、という危惧を感じています。限界はあるけれど、何らかの形で世界とつながり、世界を自分のこととして考える機会を持てるという意味では、オンラインでの学びには大きな意義があると思います。

飯島 (司会) ありがとうございます。最後になりますが、小川先生の方から一言よろしくをお願いします。

小川 言い足りなかったことだけ申し上げます。全カリのニュースレターで、「全カリ・オンライン授業への道」^{*}というものが出されていますが、これは感動的な記録でした。全カリのご尽力は、素晴らしいと思います。本学のメディアセンターの協力も、技術力だけではなく、熱意も素晴らしいと思っています。

本日のシンポジウムで、黄先生、芝垣先生、中村先生、小峯先生のお話を聞いて、ああ、本当に授業を楽しくやっていたらいいのだ、と感じました。面白い授業をつくることを、面白く感じていたらいいのだ、ということが、とても心に残りました。私はノルウェーに住んでいましたので、中村先生のオーロラの写真にも大変感銘を受けました。本日はありがとうございました。

^{*}全カリニュースレター No.48 (2020.9.14) 全カリ・オンライン授業への道
<https://www.rikkyo.ac.jp/education/system/general/overview/publication/qo9edr0000005yy0-att/letter48.pdf>

飯島 (司会) ありがとうございます。次年度も多くの授業でオンライン授業の実施が決定しております。今日の議論が、来年の授業計画、またオンラインの授業の可能性のみならず翻って対面授業の在り方について考えるきっかけになれば幸いに存じます。先生方、本日はどうもありがとうございました。